

## 第27回秩父宮記念スポーツ医・科学賞

### 功労賞受賞者

<氏名> 田中 喜代次 (たなか きよじ)

<所属等> 筑波大学 名誉教授  
日本介護予防・健康づくり学会 理事長

<年齢> 72歳(2025年3月12日時点)

<学歴> 1983年 筑波大学大学院博士課程体育科学研究科修了

<学位> 教育学博士 (筑波大学)

<職歴> 1983年～1989年 大阪市立大学教養部保健体育科 講師  
1989年～1993年 筑波大学体育科学系 講師  
1993年～2004年 筑波大学体育科学系 助教授  
2004年～2018年 筑波大学大学院人間総合科学研究科  
スポーツ医学専攻・体育系 教授  
2018年～現在 筑波大学 名誉教授

#### <その他役職>

元 日本スポーツ協会日本スポーツグランプリ選考委員

元 日本スポーツ協会スポーツ医・科学委員会委員

田中喜代次氏は、我が国の健康づくりや介護予防分野の草分け的存在にして、40年以上の長きにわたり、現在も第一人者として当該分野の発展に幅広く貢献し、牽引し続けている。

特にスポーツ医学及び健康増進学においては、国内外の医療系・体育系学術誌に760編の科学論文を発表するなど、国内で高く評価されるにとどまらず、欧米諸国やアジア諸国でも大いに注目され、著書は分担執筆を含めると57冊にも及び、我が国の国際的な学術レベルの向上にも顕著な貢献を成し遂げた。

学会活動においても同氏は、日本健康支援学会の理事長を2010年から2019年の9年間務め、日本介護予防・健康づくり学会の理事長・会長を2018年から現在も務めるなど、健康づくり・介護予防分野のリーダー的存在であり続け、国際学会においても数々の役職を務めている。また、1986年以来、アメリカ、カナダ、ドイツ、フィンランド、オーストラリア、ブラジル、中国、韓国、台湾、及び日本国内で開催された国際学会において、基調講演やシンポジウムの司会、演者を務め、これらの学会活動を通してスポーツ医学・健康増進学分野における我が国の存在感を世界の中で高めたと同時に、当分野を国内外で力強く牽引してきた。

また、日本体育協会（現、日本スポーツ協会）医・科学研究プロジェクトにおいて、2002年度から2005年度に「中高年者の運動プログラムに関する総合的研究」、2009年度から2012年度に「高齢者の元気長寿支援プログラム開発に関する研究」、2016年度から2018年度に「運動・スポーツ習慣の定着を企画した健康華齢支援プログラムの開発」の3期11年間にわたり研究代表者を務めた。中でも「中高年者の運動プログラムに関する総合的研究」において作成したガイドライン（平成14年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告NoII 中高年の運動プログラムに関する総合的研究第1報）は、2007年に超高齢社会を迎え、以降も高齢者割合が増えつつある我が国にとって、運動・スポーツ・レクリエーションを通して、要介護・寝たきり予防を実現し、より多くの中高年者が、健康で活力ある期間（健康寿命）を長く維持するための有効な手引きとなりうる。この研究成果により、同氏を代表とする研究グループは、2008年度に第11回秩父宮記念スポーツ医・科学賞奨励賞を受賞している。

さらに、これらの研究からEnjoy Sportsによる健康華齢（successful aging）なる概念が生まれた。そのプログラムが4冊の著書に集約されており、我が国の中高年者の身体活動の促進や健康増進に大きく貢献した。

その他、スポーツ医学および健康増進学に関する研究成果により、2021年に日本教育医学学会功労賞など数多くの研究表彰を受賞している。日本スポーツ協会においては、スポーツ医・科学委員会委員、栄典・顕彰委員会委員を長年にわたり務め、このほか2008年6月に日本政府（外務省）による日本人ブラジル移住100周年記念講演会において、「Life Quality: Japanese and Brazilian Experience」をテーマに講演、2015年10月以降は、中央民族大学体育学院（中国）の客員教授を務めるなど国際的な活躍も顕著である。2005年には筑波大学発ベンチャー企業（株式会社THF）を設立し、現在に至るまでの20年間にわたり、研究知見を社会実装化するなど、健康支援の現場においても卓越した成果を残している。

同氏は、グローバルに卓越した研究者であるとともに、諸学会の活動や社会への普及啓発活動など多方面において顕著な実績を残しており、スポーツ医・科学への貢献は多大である。

## 第 27 回秩父宮記念スポーツ医・科学賞 奨励賞受賞者

<グループ名> 和歌山県立医科大学 げんき開発研究所 障がい者スポーツ研究グループ  
<代 表> 田島 文博 氏

げんき開発研究所は、障がい者スポーツ医科学研究の推進と県民の健康増進を目的として、2009年に和歌山県立医科大学みらい医療推進センター内に設立された。

同研究所のメンバーを中心に構成された障がい者スポーツ研究グループは、医学部を有するという大学の特徴を活かし、当時手つかずであったパラスポーツの基礎医学的分野の研究を脊髄損傷選手から開始した。実際の競技前後の血液生化学・免疫学的解析を行い、パラアスリートの身体的特性やトレーニング効果に関する科学的知見を蓄積し、これらの成果は国内外で学術的評価を受けている。以降、パラスポーツ分野における新たな知見の提供や理論的基盤の構築にも貢献し、実践研究では、脊髄損傷者等のパラスポーツ選手競技力向上を目指した取組も進めている。

また、障がい者スポーツ医科学分野の研究拠点として卓越した実績を有し、文部科学省から「障がい者スポーツ医科学研究拠点」に認定されS評価を受けると、強化拠点にも指定された後、スポーツ庁の「地域におけるスポーツ医・科学支援体制構築事業」を受託するなど高い評価を得ている。

さらに、ラフバラ大学、ブリティッシュコロンビア大学等海外の大学からも若手パラスポーツ研究者を受け入れ、国際シンポジウムを毎年のように開催し、共同研究論文も多数発表するなど、国際的にも高い評価を得ている。

その他にも同研究グループの障がい者スポーツ医が夏季・冬季パラオリンピックの他、様々な国際大会のメディカルチェックを担当し、28種目、2000名以上の出場選手の海外渡航、大会参加に貢献してきた。

特にパラ陸上競技については、2012年以降に測定やサポートをした選手のうち、国際大会での入賞が7種目にのぼり、金・銀を含む複数のメダル獲得に貢献し、現在は水泳、アーチェリーなどの選手に対してデータ測定やサポートを行い、全国から同研究所の設備やサポート能力を求めて依頼が来ている。地域でパラアスリートを医科学的に支援する体制の構築に向けた取組も行い、研究やコーチングにとどまらず、制度の社会実装まで視野に入れた活動を続けている。

このように同研究グループのメンバーである研究員がスタッフとして大会に帯同し、現場で選手やコーチと密接に連携することで、科学的根拠に基づくサポートを提供し、選手のパフォーマンスの向上を支援している。こうした同研究グループの医科学的な研究成果に基づいた指導が、2016年リオデジャネイロ、2020年東京、2024年パリパラリンピックにおけるメダル獲得や上位入賞の要因の一つである。

これらの取組によりパラスポーツ医科学研究の発展に貢献し、選手の健康維持増進と競技力向上に寄与していることから奨励賞を授与する。